言い伝えの継承

板橋区立志村第四中学校２年　菊池（きくち）　香帆（かほ）

茨城県にある霞ケ浦付近にたまに落ちている、鳥の足跡のような模様が描かれた石。一見どこにでもありそうなただの石に見えるが、実はそうでもないらしい。

私の祖母の家は霞ケ浦付近にある。そのため、小さい頃はよく霞ケ浦に行った。近頃はあまり行かなくなったが、最近ふと、以前霞ケ浦に行った際に母が話してくれた話を思い出した。

「このあたりに落ちているこの石の名前、知ってる？」

そう言って母が指さしたのは、なんの変哲もない、ただの小石。しかし、よく見てみると何か模様が書いてある。鳥の足跡のような模様だ。偶然できた模様ではないらしく、近くにも同じような石が転がっている。なぜこのような模様ができるのか。私は不思議に思い、母に尋ねた。すると、母はこう言った。

「この石は小紋石と言って、安産祈願のお守りになるのよ。」

なぜこの石が安産祈願のお守りになるのか、そこまでは母も知らなかった。だが、母が小さい時からこの石はあるのだという。

その時は何も思わなかったが、今になって少し興味が湧いてきたため、調べてみることにした。すると、この石には少し悲しい話があった。

安土桃山時代の前期、霞ケ浦南岸を支配していた浮島城主の浮島弾正は、敵軍の攻撃を受け、やがて落城。そして浮島軍は滅亡してしまった。この時、ただ一人死を免れた弾正の愛娘も、霞ケ浦に身を投じて自決してしまう。そして、弾正の愛娘が自決した際に着ていた振袖が石に化けて、石には紋が残されていたという。小紋石の名前は、この石に残された小さい紋の模様から来ている。残念ながら、なぜこの石が安産祈願のお守りになるのかは、詳しく分かっていない。だが、いつからか、この小紋石を持ち帰ると安産に恵まれるという言い伝えが広まり、それが今世まで伝わっているらしい。

しかし、この言い伝えも、今では知る人が少ないという。母も、祖母の口から聞いたのではなく、家にある本に書いてあったことを見ただけらしい。これは、言い伝えの継承としては、かなり深刻な事態であると思った。

言い伝えは、人々の口から語り継がれていく。そのため本来ならば、親から子、またその子から子へと語り継がれていくはずである。ところが、最近では子供が興味を持たない、親も言い伝えをあまり覚えていない、などの理由で、言い伝えを子供へ話さない家庭

も多い。そうすると、当然ながらその話を知るものはいつかいなくなり、その地域の言い伝えも、そのうち忘れさられてしまうだろう。

言い伝えには、さまざまな歴史がある。私は、母だけでなく、祖母からもたくさんの話を聞いた。そして、その中には戦争に関することなど、重要な話も多くあった。だが、私がこの話を語り継いでいかなければ、祖母のさまざまな体験も静かに忘れさられてしまう。それだけは、絶対に避けたい。

言い伝えをずっと語り継いでいく。それは本当に大切なことだろう。私も母が話してくれなければ、この小紋石のことなど知らなかったのだから。地域それぞれにたくさんの歴史があり、それを語り継いでいくことで、歴史は紡がれる。私も、自分の子供や孫に言い伝えを話し、この歴史を紡いでいきたい。

すごいぞ！ 塩の力

板橋区立板橋第四小学校４年　矢﨑（やさき）　瑛（あきと）

ぼくは、「お清めの塩」について調べました。理由は、二つのことがむじゅんしているように思ったからです。

一つは、おととしの秋にぼくのひいおじいちゃんが亡くなったときのことです。母がおそう式に出た後にはお清めといってせなかや足元に塩をふりかけてから家に入る習かんがあると教えてくれました。そこで使うのが、「お清めの塩」であると言っていました。そのときは、母もぼくもお清めはしませんでしたが、塩をふりかける、まくということが頭に残りました。

もう一つは、夏休みに読んでいた本からむかし香川県や石川県には塩田があったこと、塩は人間や動物が生きていくうえでなくてはならないものであることを知ったからです。塩が生命のいじに不可欠な成分なので、以前は誰もが塩を手にすることができるように国が値段を決めていたと母が説明してくれました。せん売公社というところが塩を扱っていて、いまではスーパーに行くと売っている外国からゆ入したヒマラヤ岩塩、湖塩など、色々な種類の塩はおいていなかったそうです。

この二つのことから、ぼくは人間にとって大事な塩を、お清めではまく、捨てるようなことをするのはなぜなのかわからなくなりました。そこでぼくは、塩をまくのはなぜかを調べることにしました。父と図書館で調べると、塩はものをくさらせない、保存の力があるので、まいて使われるようになった（たかなし、二〇〇六）、神道では死は不じょうであるため塩で身を清める、これはすもうで塩をまくのも同じ（橋本、二〇〇九）と書いてありました。

ぼくは父がお清めの塩をしているのか聞いてみました。そして、父はしていないことがわかりました。自分の親もしていなかったからということでした。お清めをする習かんがあるかないかは、お父さんやお母さん、おじいさんやおばあさんから教えてもらうかどうかなのかなと考え、ぼくはお盆に、祖母、母のお姉さん、母のお兄さん、そして母に聞きました。ぼくの母は両親ときょうだいの五人家族でしたが、祖母は両親ときょうだいと祖母の祖父母の七人家族でした。

ぼくが聞いたのは、１. おそう式に出た後は、お清めをするか、２. する場合もしない場合もその理由、です。コロナで会いに行けなかったので同じことをメールで母の友達に

も聞いてもらいました。その結果を表にまとめました。子どものときに親と子で生活していた場合を「かく家族」、親と子と祖父母などと生活していた場合を「かく大家族」と分けました。

育った家とお清めをしているかの整理表

	男	女
拡大家族	○　Nさん ○　Sさん △　Hさん	○　Aさん ○　Iさん ○　ぼくの祖母
核 家 族	×　Kさん ○　ぼくのおじ ×　ぼくの父	○　ぼくのおば ×　ぼくの母

○　している
×　しない
△　けっこんしてからするようになった

かく大家族で育った人達のほとんどがお清めをしていることがわかりました。理由は、「親から教わったから」（Sさん、Nさん）、「祖父母や親がしていたから」（Aさん、Iさん、祖母）でした。いまはおそう式に出るとお清めの塩が入った小袋をもらえるけど、それがなかったときは、家族がげん関前に塩のつぼと水の入った洗面器とひしゃくを置いてくれていて、げん関をまたぐ前にお清めをしたと祖母が教えてくれました。Iさんは、おそう式から帰るとげん関の外から家の中の家族を呼び、呼ばれた家族は塩を持って外に出てきて、おそう式に行った家族にかけてあげるようにしていて、その手伝いもしているうちに、そういうものだと思うようになったと、メールに書いてくれました。

かく家族で育った人は、お清めをしている人とそうでない人に分かれました。している場合の理由は、「親から教わったから」（ぼくのおば）、「けいけんを通してするようになったから」（ぼくのおじ）です。していない場合は、「両親はしているけど、自分はお清めに塩を使って邪気をはらうというのは迷信だと思うのでしない」でした（Kさん、ぼくの母）。母は、「けがれ」は「気枯れ」で、命の弱まりを意味するからそれを取りのぞくのに塩をまくと考えられていると言っていました。

大家族で生活をしているほうが、家族がおそう式に行くことが多いので、家に帰ってきてお清めをしている場面を見たり、教えられたり、一緒にすることが多くなる、そして自然に自分もするようになりやすいことがわかりました。かく家族で育った場合は、親からのえいきょうを受けている場合と、自分の考えでお清めをする、しないを決めている場合

がありました。ぼくも自分で考えて、お清めをするか、しないかを決めようと思いました。

お清めの塩は、悪いものをたち切って人を守る、それはその人の家族を守ることにつながるので、むかしから行われてきたことがわかりました。塩はからだの中でも外でも力をはっきしていることを知ることができました。

参考文けん

たかなしひろきへん （二〇〇六）『塩の絵本』 農文協

橋本壽夫 （二〇〇九）『塩の事典』 東京堂出版

おばあちゃんの通った円形校舎

板橋区立板橋第五小学校４年　中山（なかやま）　春（はる）

「まあるーいこうしゃのかいだんは♪あかいタイルをしきつめた　おとぎのくにのごてんです。」

夏休み久しぶりに会ったおばあちゃんが、ごきげんに歌っていました。私は、かわいい歌だと思いました。歌詞を聞くとまるい校舎とあり、とてもふしぎに思いました。私の通っている板橋第五小学校もいままで見た学校にもまるい校舎などなかったからです。そこで、おばあちゃんにくわしく話を聞き、実際に行くことにしました。

おばあちゃんの通った小学校は、鳥取県倉吉市明倫小学校です。

明倫小学校には、今ではめずらしい円形校舎が建っています。円形校舎とは、1950年代に大阪、兵庫、奈良を中心に鹿児島まで広く多数建設されました。全国には、約100棟が建設され、60年以上経ち老朽化のためその多くは、解体されているそうです。明倫小学校の円形校舎は、1955年（昭和30年）から1977年（昭和52年）まで小学校として使われ、その後地域の公民館として使われてきましたが、2014年に取りこわされることになったそうです。しかし、多くの市民が取りこわしに反対し、市民有志が提案したフィギュア博物館「くらよしフィギュアミュージアム」を支援するための運営団体に無償でじょうとされました。耐震補強とエレベーターの設置は国の補助金だけでは足りないため、フィギュア制作会社の海洋堂と米子ガイナックスの協力を受け、クラウドファンディングにより調達されました。2018年４月７日に円形劇場くらよしフィギュアミュージアムとしてリニューアルされました。この円形校舎は、日本で３番目に建てられたもので現存する日本最古のものです。また、一般公開されている唯一の円形校舎です。

円形校舎について調べた私はふしぎに思ったことがありました。どうして今は円形校舎が作られなくなったのだろう。実際にミュージアムに行き職員さんに聞きました。

円形校舎がさかんに建てられた1950年代は、戦争が終わった後の日本で人口が急に多くなったそうです。小学生も多くなり教室が足りなくなりました。そこで、建設費用が安くせまい土地に建てられる円形校舎がはやったそうです。丸い校舎の周囲は、ぐるりと窓ガラスなので教室内が明るく電気が少なくてすんだそうです。しかし、良いことばかりではなくデメリットもありました。生徒の増加に対して増築しにくいことや、らせん階段が校舎の真ん中に一つしかないため非常時の経路が限定されてとても危険だということです。

なるほどなあと思いました。

ミュージアムの３階には昔の教室がそのまま再現されていました。教室の形は、扇型でせまい方が前で大きめの黒板があり、生徒は外の窓ガラスに背を向けてすわります。１クラス40人くらいだそうです。

いっしょに行ったおばあちゃんは、屋上に行くと「なつかしいなあ。ここでよくバレーボールしとったわ。」と言っていました。低いフェンスしかない屋上でボールが落ちないのかとびっくりしました。

教室の一番前に立ってみると扇型になっているので生徒全員が、よく見わたせました。校舎の真ん中のらせん階段は、１階から屋上までずっとつながっていて、１番上からのぞくととても高くてドキドキしました。

円形校舎について調べて感じたことは、四角形の校舎よりも円形のほうがおもしろくて学校に行きたくなると思いました。校舎の色を食べ物みたいにしたらたのしいかなと思いました。ミュージアムは、補助金だけでなくたくさんの人の協力でできたと知り、みんなが協力すればいろいろなことができるんだと思いました。

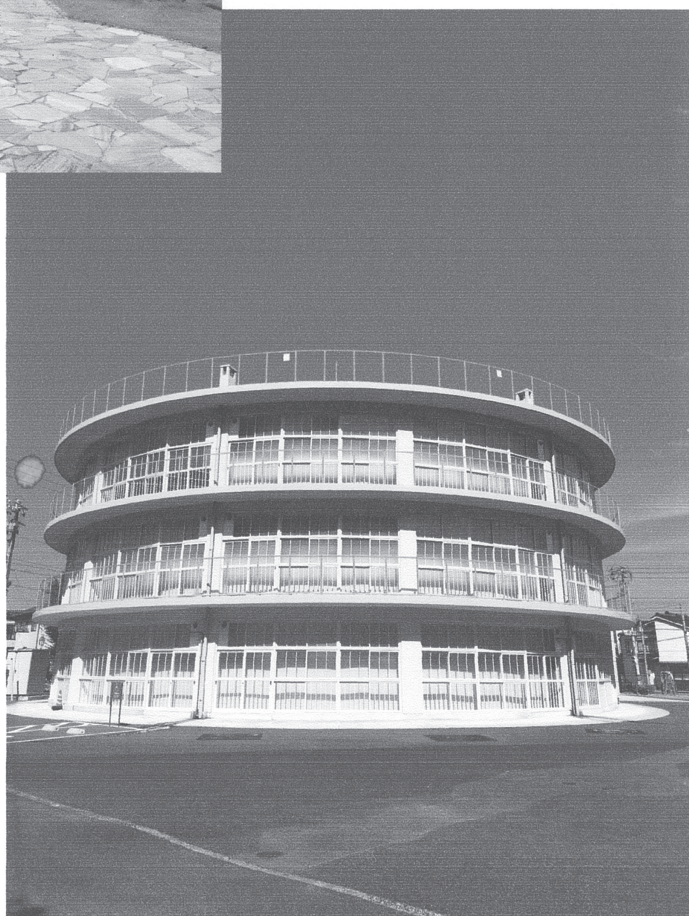
おばあちゃんは自分の小学生時代を思い出し、とてもうれしそうに話をしてくれました。私もおばあちゃんになったとき、板橋第五小学校に遊びに行ったり、同級生のお友だちといっしょにごはんを食べに行ったりしたいなと思いました。

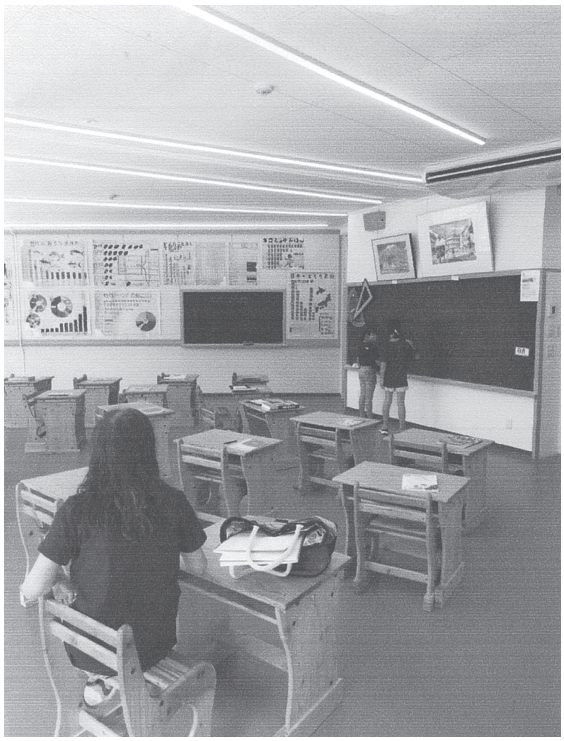
古いものを大切にしたり、お友達と仲良くすることが本当に大事なのだと気づいた夏でした。

円形劇場くらよしフィギュアミュージアム

正面

裏側

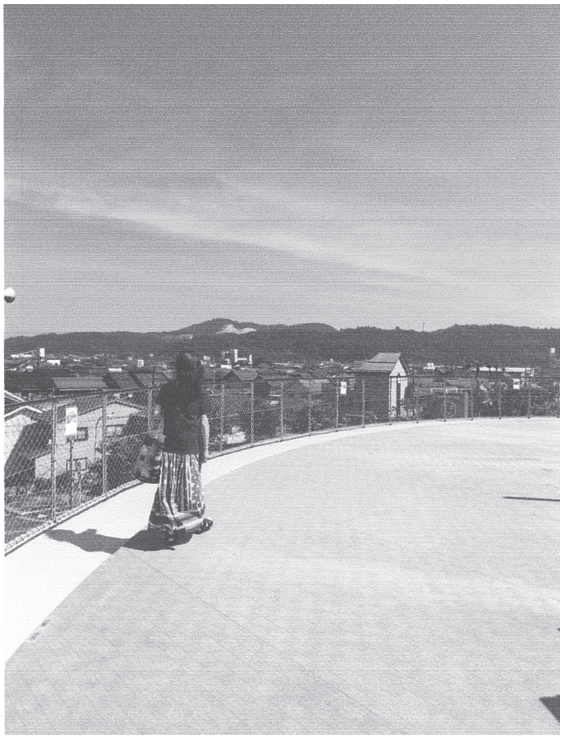




扇型の教室

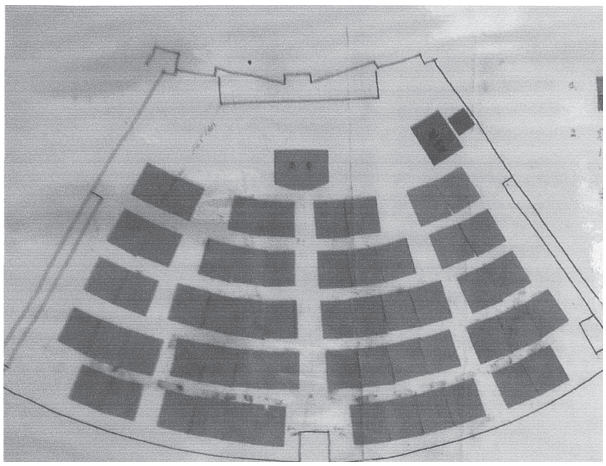
つくえといすはとうじのまま
木でできていました。

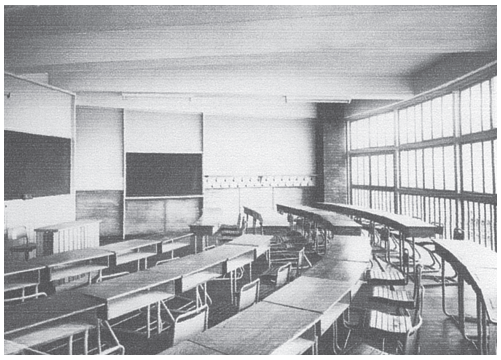
校舎の真ん中にはらせん階段

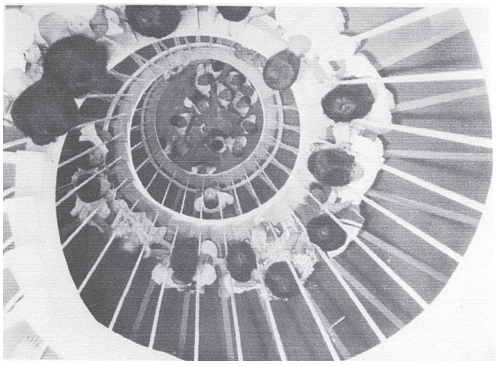


屋上から倉吉市内が見わたせます。

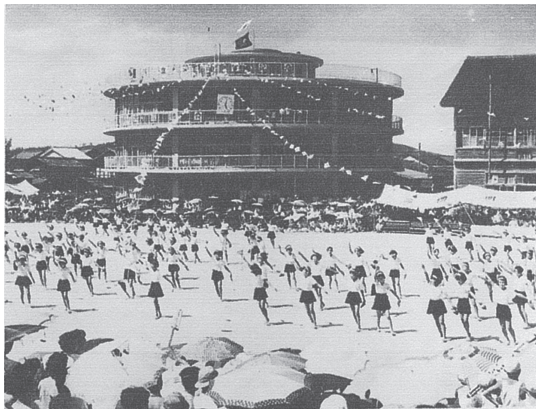
昔の教室

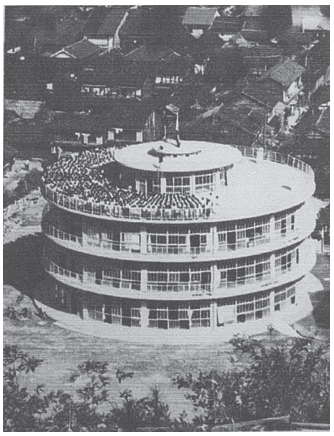




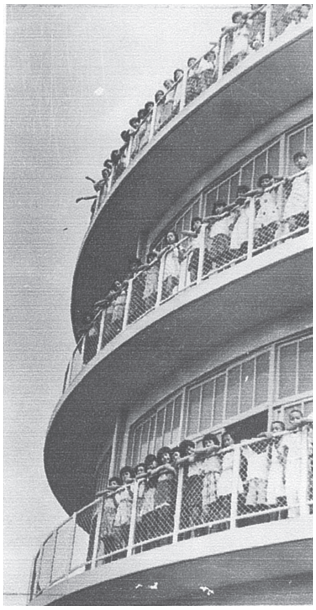


昔の運動会の様子





屋上でバレーボール



土器から考える２千年前の磐田

磐田市立磐田西小学校４年　佐藤（さとう）　迪洋（みちひろ）

毎年ぼくは吉野ケ里遺跡に行く。今年は県外規制で行けず残念だった。でも地元で「２千年前のイワタ」という企画会があると知り、早速見に行く事にした。

そこでぼくはすごく感げきした。土器も農具もガラスケースではなく、そのままかざられていたからだ。目の前に生の土器がある。弥生土器を見ているというよりも、ぼくが弥生時代に来たような感じがした。これまで遺跡にあちこち行った事があるが、これほど弥生土器を間近に感じたことはない。来て本当によかったと思った。

土器を見ていておどろいた事がある。吉野ケ里の土器はもようがない物が多かったのに、磐田の物にはもようがあったのだ。丸い粘土をはりつけたような土器もある。質問したら、「よく分からないので、専門家をよびます」と言ってくれた。

しばらくして研究員さんが来てくれた。「弥生土器は文様なしと教科書に書いてあるけど、小学生が分かりやすい様に書いてるだけで、実際は縄文土器の様に文様がある物は多い」と教えてくれた。ぼくは「狩りをする人やぬい物をする女性が銅たくにかいてあるって図かんで知りました。弥生土器のもようにも何か意味があるんですか。」と聞いてみた。研究員さんは「もようだから意味はないと思うけど、もしかしたらあるかもね。」と答えてくれた。

土器の近くに展示していた銅たくには、鳥の絵がかかれていた。同じ磐田の弥生時代に、意味のある絵をかくことは十分考えられる。だからぼくは土器をスケッチし、調べてみることにした。

図書館や公民館に行き、本やHPを調べた。文様の作り方やでき方について書かれたものはたくさんあったが、もように意味があると書かれたものはなかった。

あきらめかけていた時、「絵がかかれた土器が大阪のいせきで見つかった」という新聞記事を見つけた。写真の土器のはへんには建物がかかれている。これは「土器の文様」ではなく、「絵画土器」という別の物だと知った。これまで磐田ではもようにに意味はないと言われてきたけれど、もしかしたらあるかもしれない。

ぼくは絵画土器の分せきを参考にして、ぼくのスケッチを分せきしてみた。たしかに、多くは文様かもしれないと思ったが、スケッチ⑧は絵に見える。１つずつ分せきしてみよう。

①３つの考えがある。１つは、田んぼにはりめぐらされたさくではないかという考え。たて線はさくのぼうだ。２つ目は、横線が堀、たて線が橋ではないかという考え。３つ目の考えは、階だん。研究員さんの話では、磐田では弥生時代に倉があった事、高床の竪穴住居もあった事を教えてくれた。だから、家や倉に上る時の階だんだったかもしれない。１と２を考えた時、ぼくは、これを地図としても使ったかもしれないと考えた。ムラ同士交流しているうち、土器に何かを入れておすそ分けしていたかもしれない。土器を返す時、土器に地図のようなきのうがあれば、それを見ながら送り主の所まで返しに行ける。弥生時代は紙がなかったというから、これはとても便利だ。

②、③は磐田の海がある環境を表しているという考え。磐田には遠州なだがある。だから、曲線は波を表していて、下の線は砂、上の線は空ではないか。③は浅い海ということになる。ぼくは、これにも特別なきのうがあったのではないかと考えた。弥生時代にとうめいなガラス容器はない。中に何が入っているか、のぞかないと分からないのは不便だ。このように波が書いてあり、一目で海の物が入っていると分かれば、中身をのぞかなくてもいい。それに対し⑨、⑩の土器は草原や畑を表していると見えるので、山の物が入っていたかもしれない。

⑤、⑥は、直線もようの中を、曲線が通っている。ぼくは川を表しているのではないかと考えた。磐田には太田川や天竜川など多くの川がある。曲線の周りの直線は、水田ではないかと思った。今でも、川の周りには水田が広がっている。もしかしたら、２千年前の磐田と同じ様な風景かもしれないと思うと、わくわくした。ぼくは、どの川なのか知りたくなった。妹と一緒に、太田川や天竜川を、海まで自転車で走ってみた。天竜川ははばが広く、曲線というよりは直線だった。太田川も曲線はあったけれど、やはり直線が多かった。６つの川を走ってみたが、結局土器にかかれたようなくねくねした川は見つからなかった。もしかしたら昔の川はもっと曲線だったのかもしれないし、ムラの水路を表しているのかもしれない。これからも引き続き調べていきたいと思う。

⑦は土器全体がげいじゅつ作品の様だ。中央の丸い物は、ほられた物ではなく、はりつけられた物だ。これはペンダントのようなそうしょくひんを表しているのではないかと思った。つまり、土器全体がマネキンのような感じで、女の人がペンダントをつけた例に見える。弥生時代は物々交かんをしていたそうなので、この土器を相手に見せれば、相手がペンダントをほしくなったかもしれない。

⑧一番注目してほしいのは、鳥のような絵（スケッチ中央）。３羽いる。磐田は海がじ

スケッチ

①
梵天遺跡
さくのぼう
かいだん
さく
御屎二之宮遺跡
②
馬坂遺跡
⑦
⑧
蔵平遺跡
鳥形土器
大宝院寺遺跡
⑨
⑩
加茂東原遺跡のごう
③
馬坂遺跡
④
⑤
御殿二之宮遺跡
⑥
御殿二之宮遺跡

まんなので、ぼくは最初エビではないかと思った。でも、目の下にめだつもようがある事や、特ちょう的なハサミがない事から、エビではないかもしれないと考えた。この絵に特ちょう的な物は、大きなくちばしと長い尾。だから、これは鳥かもしれないと考えた。研究員さんは「磐田の銅たくには鳥の絵がかかれているし、鳥型土器も見つかってる。磐田は鳥をしんこうしていたかもしれない」と教えてくれた。だから、これは鳥のいる磐田の環境ではないかと考えた。鳥の周りには丸い物がいくつもある。特に、鳥の前に４つの丸がはっきりとかかれている。これは、鳥がたまごをうんでいるところかもしれない。その周りに、小さい丸もたくさんほられている。つまり、たまごをたくさんうむ鳥で、特に大切にされていたのかもしれない。ぼくはこの鳥が何なのか気になり、御殿遺跡公園や、二之宮遺跡近くの大池へ鳥の観察に行った。「大きいくちばし」「目の下の大きなもよう」「長い尾」「１度に４つのたまごをうむ」の４点に合う鳥はいなかった。次に、母と妹にも協力してもらい、図かんで日本中の鳥を調べた。その結果、これに合う鳥は36種類いた。でも土器の絵とそっくりとまではいかない。もしかしたらぜつめつした鳥かもしれないし、鳥ににた新生物なのかもしれない。他の生物もふくめ、これからも引き続き調べていきたいと思う。

弥生土器から、当時の環境や生活がわかると思う。研究員さんが「磐田にある三枚の銅鏡は、ヒミコがくれたものかもしれない」と言いながら、銅鏡を見せてくれた。邪馬台国がどこにあるかまだ分からないけれど、弥生時代の土器のもようを調べる事で分かるかもしれない。「ただのもよう」ではなく「貴重な情報」だと考えて、これからは全国の遺跡の土器のもようを調べてみたいと思う。

〈参考にした本、インターネット〉

『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会　2008
『加茂東原Ⅰ遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会　2009
『大原墳墓群調査報告書』磐田市教育委員会　1984
『匂坂中遺跡群発掘調査報告書』磐田市教育委員会　1994
『馬坂遺跡・馬坂上古墳群発掘調査報告書』磐田市教育委員会　1998
『長江崎遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会　1996
『中山古墳群・二ヶ谷遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会
『京見塚古墳群発掘調査報告書』磐田市教育委員会　2001

『野際遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会　1994
『玉越遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』磐田市教育委員会　1986
「弥生土器にみる形と文様」和田麻衣子『広報あきたかだ』平成29年６月号
「えひめ弥生土器文様素描」 まいぶんえひめ　NO. 29　財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 編　2002
『鹿児島の縄文土器から薩摩焼まで』鹿児島大学総合研究博物館
「群馬の縄文土器」香芝市二上山博物館
「縄文土器の文様を作ろう」狭山市教育委員会
「縄文土器文様に見る物語の世界」山梨県埋蔵文化財センター
「絵画土器　茨木市中河原遺跡」茨木市教育委員会
「弥生時代の土器からみた交流」岡山市埋蔵文化財センター
「安城市　土器ができるまで」
https://www.city.anjo.aichi.jp/shisei/shisetsu/kyoikushisetsu/documents/dokigadekirumade.pdf
「古代の絵画表現について」京都市考古資料館
https://www.kyoto-arc.or.jp/News/s-kouza/kouza270.pdf
「弥生時代」宮崎県埋蔵文化財センター
http://www.miyazaki-archive.jp/maibun/teacher-kit/yayoi
「弥生土器の時代」福岡市博物館
http://museum.city.fukuoka.jp/archives/leaflet/298/index02.html
「なぜ、縄文土器の模様は、縄や竹でつける？」栃木県埋蔵文化財センター
https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/knowledge/detail.php?seq=26
「絵画土器」東町田遺跡
https://www.city.ogaki.lg.jp/cmsfiles/contents/0000017/17408/kaigadoki.pdf
「絵画土器」加須インターネット博物館
http://www.kazo-dmuseum.jp/01history/01genshi/03_02.htm
「続縄文心象」 http://www.joumon.jp/wp-content/uploads/zokusinsyou.pdf
「縄文（文様）について」横浜市歴史博物館
https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/knowledge/detail.php?seq=26

語り継いで残したい遺跡

板橋区立北前野小学校４年　河西（かわにし）　尚香（なおか）

みなさんは「遺跡（いせき）」が何か知っていますか。遺跡とは、大きく二つに分けられます。一つは「遺物」です。遺物とは、今も形が残っている動かすことが可能な土器や、勾玉などの装飾品に使う物などのことを指します。もう一つは、「遺構」です。遺構は、昔の人たちが建てた住居の跡や、食料を得るために作られた陥（おと）し穴など、地面にある動かすことのできない跡のことです。

元々私は、化石などの昔のことについて興味を持っていて、母が遺跡のことを紹介してくれて、調べていくうちに、遺跡はひとくくりではないことや、違いがあることに気がつき、奥が深いことを面白いと思い、調べることにしました。

今回、私が調べた遺跡は「兎谷（うさぎやつ）遺跡」です。通っている学校の近くにあります。

遺跡というのは、人知れず建物の下に埋まってしまうことも少なくありません。兎谷遺跡の場合も、マンションの建設工事で発見され、他にも遺構や遺物があるかも知れないと、この遺跡のための調査会ができ、明治大学の考古学の教授や先生などのたくさんの人たちで発掘調査が行われました。

その調査で見つかった遺物の数は百を超えています。なぜなら、土器などの欠片や破片などは、その欠片で一こと数えるからです。また、同じ時代のものだけではなく、色々な時代のものも、発見されました。

兎谷遺跡では、土器が、たくさん見つかりました。この土器は主に煮炊き用として火にかけて使っていたとのことです。確かに、郷土資料館に展示されているいくつかの土器を見てみると、下の方が黒くなっていて、火でこげたか、ススが付いたのでは、と私も思ったからです。

この兎谷遺跡で出土（しゅつど）した土器の、一番古いものは縄文時代のでした。そして、弥生時代のものも、たくさん見つかりました。これらの土器を調べると、土だけで作られているもの、イノシシなどの動物の毛が練り込まれているもの、砂が混ざっているもの、足付きのものなどが出土しました。この違いは、それぞれの土器が使われていた時代の違いだったのです。でも、理由は他にもあり、人々が土器をこわれにくく、丈夫にするために混和材（こんわざい）として、砂などの色々なものを混ぜたり、運びやすいように軽くしたり、早く煮えるように器の下にあしを付けたりした工夫の違いでもありました。特にあしを付けたことは、現

代のガスコンロの五徳のような考え方です。何十万年も前に気づいていたこと、それが今に繋がっていることに驚きました。

兎谷遺跡では、色々な時代の様々な土器などが発見されましたが、なぜ時代まで分かると思いますか？これについては、どの地層から出てきたのかがとても重要だそうです。出土した遺物と地層などを総合的に調べ、判断していくそうです。

兎谷遺跡で出土した土器の中に、「前野町式土器」と名付けられたものがあります。当時、遺跡の研究をしていた杉原荘介さんという考古学の先生が、弥生時代終わり頃から古墳時代の初め頃の土器に名付けました。この時代の土器を研究する基準となるものだったことから、出土した町名を取って「前野町式土器」にしたそうです。まさか自分の住む町の名前の土器があり、それが歴史を調べる上で基準の一つとなっていることにとても驚きました。この「前野町式土器」は、町内にある常楽院というお寺にも、出土したものや近所の方から寄贈されたものが展示してあり、杉原先生も見たそうです。その当時は、常楽院収蔵の土器は全て「前野町式」と思われていましたが、研究が進んだ現代では色々な視点や考え方があるようで「前野町式」の結論はまだ出ていないそうです。

兎谷遺跡では陥し穴もたくさん見つかりました。これは動物を捕獲するための罠でした。主に猪やシカを捕獲していたようです。骨や毛が出土しています。穴に落ちた動物を生けどりにするのかと私は思っていましたが、陥し穴の写真を見ると、中に丸く穴がありました。実は中に棒を立てていたとのことです。穴に落ちた動物が刺さるような仕組みで、自分たちより大きく、力の強い獲物を捕獲するための知恵だと思いました。また、陥し穴の形も大きさも様々でこれも遺跡の魅力だと感じています。

兎谷遺跡の兎谷は、今の前野町一から五丁目辺りを指します。兎谷とは昔の字名で、町名は変わるけど字名は変わらないからと言うことで遺跡の名に付いたそうです。明治時代の史料に書いてあり、今は暗渠となっている出井川によって作られた谷が「兎谷」と呼ばれていたそうです。ちなみに「谷」とは台地が削られた谷状の土地によく付けられているようです。

さて、発掘調査が終わった兎谷遺跡はどうなったと思いますか。最初に説明したように、マンションの建設予定地だったので、遺跡が取り出された後、遺構の上にマンションが建ちました。私はとても残念に思いましたが、遺跡をそのまま保存していくと現代の私たちの住む所がなくなってしまいます。今回、私は色々な方にお話を聞きましたが、皆さん、「遺跡との共生共存が課題」と言われていました。だから調査をし、記録をして残し

ていくのだと。しかし私はそれだけでなく、たくさんの人に遺跡や記録の存在を伝えて知ってもらい、語り継ぐことも大事だと思います。常楽院の方も「今はあまり展示物を見に来る方がいない」と寂しそうでした。身近にある遺跡を知る人が少なくなってきているからではと思いました。何十万年も前からずっと人が住んでいる前野町はきっとこれからも人が住み続けると思います。なので、遺跡のことを町ぐるみや学校などでも伝えていくことができればと強く思います。

最後に、今回私は教育委員会の方や郷土資料館の中村(なかむら)さん、常楽院の守山(もりやま)さんにたくさん教えて頂きました。また、区のホームページで字(あざ)名を調べてみると、「兎(うさぎ)谷」は無く、「免(めん)谷」がありました。もしかして、どちらの字もあるかと思い、資料館の中村さんに聞くと、兎(うさぎ)の字だけとのことでした。そして、区役所の戸籍課へ質問してみると、「兎(うさぎ)谷が正しいです」と返事が来て、区の資料の「免(めん)谷」が全て訂正されることになりました。どの方も丁寧に私の質問に答えてくれたので、とても嬉しかったです。これも遺跡が繋げてくれた縁だと思います。本当にありがとうございました。

遺跡調べはとても楽しかったです。いつか本物の土器を手にしたら、自分で調べたいです。

〈お世話になった方々〉

・板橋区教育委員会事務局生涯学習課文化財係

・板橋区立郷土資料館　中村さん

・常楽院　守山さん

〈参考文献〉

・『東京都板橋区前野兎谷遺跡―「ヴェルレージュ板橋前野町」建設に伴う発掘調査報告書―』板橋区前野兎谷遺跡調査会　1998

・『特別展　杉原荘介と前野町遺跡～考古学の基礎を固めた巨人～』板橋区立郷土資料館　2004

戦争を乗り越えてきた夫婦の言葉

板橋区立板橋第五小学校４年　本間（ほんま）　梨々華（りりか）

私は戦争を知りません。知ろうと思ってニュースや新聞を見るけど、目をそむけたくなる映像や写真が出てきたりすると、つらくてそこで見るのをやめてしまいます。

二〇二〇年八月十五日は、戦後七十五年目。私が小さい時からお世話になっている、今年九十才、八十五才になる、近所のご夫婦にお話を聞くことができました。

おじいさんは板橋区出身、戦争当時十四才でした。焼夷弾という爆弾を乗せたアメリカの戦とう機B29が、東京の空を飛び回り、昭和二十年三月十日の夜中、その爆弾がたくさん落とされました。家や建物、地面に落ちた瞬間、しょう撃でバーッと火がついて、まるで昼間のような明かりになったと思ったら、一面が火の海になりました。毎日毎日何度もB29がドカドカと焼夷弾を落とすので、人々はもう何も抵抗できず、ただ逃げるしかありませんでした。不発弾や小さな火は、バケツリレーのようにして消火することもあったけど、青年は兵隊になっていたので年寄りと子どもで消すしかなかったそうです。一度だけ自分の目で四機の大きな戦とう機の中に一機だけ日本の戦とう機が体当たりをして、敵にはねつけられて一気に落ちていったのを見たのが忘れられないと言っていました。

板橋第五小学校近くの山手通りより池袋方面のほうがほぼ焼けてしまい、おじいさんが住む家からも普段見えない遠くの方まで見えたそうです。空しゅう警報が鳴るたびに防空頭巾をかぶって、家の縁の下に掘った防空ごうに入り、夜は寝ることもできず、「とにかくおっかなかったなぁ。」
と、言っていました。

おじいさんが十四才の時は中学二年生で最上級生でした。十五～十六才以上の男の子は全員、少年航空兵などの兵隊に出されていました。当時は勉強はできず、配属教官といって軍人上がりのおじいさんが来て軍事訓練をしていたそうです。また、“勤労奉仕”として成増の軍事工場に行かされました。浅草やむさし境にまで行って焼け跡の灰を処理したり、リアカーでたくさんの荷物運びや整理をしていました。そんな遠い場所へ行くのに、歩いて行くのかなと思ったら、電車で行ったと言うのでおどろきました。たくさん爆弾を落とされたのに、電車はほとんどやられずに済んだなんて信じられなかったです。見渡す限り焼け野原だったけど、おじいさんが住む家の周りは少しだけ畑や家が残っていました。だけどとにかく食べ物がないことが一番困ったそうです。配給も、たまにあったけ

ど、やっぱりそれだけでは足りず、山梨県の田舎町まで行ったり、自転車で成増の農家まで行ったり、千葉県まで行ってわずかなお米を買いに行ったり、時には物々交換をして食べ物を探し回ったそうです。あまりにも食べ物がないと、雑草を食べてなんとかして命をつないでいたと言っていました。そして、おじいさんが戦争でつらかったことを聞くと、担任の先生が“出征”といって軍隊に加わって戦場に行くことになり、絶対無事に帰ってくることを祈って生徒みんなで池袋まで見送りに行ったそうです。だけどすぐに先生は“英れい”となって帰ってきてしまいました。

「先生は二度目の出征だったけど、こんなに命ってはかないものかと思うと泣けてきたね。」と、さみしそうでした。

“英れい”について調べてみたら、特に戦争で亡くなったたましいを敬うと書かれていました。昨日まで毎日楽しく過ごしていた先生が、亡くなって帰ってくることがどんなにつらくて悲しいことか、想像しただけで私も涙が出そうなのをがまんして聞いていました。

おばあさんは山梨県出身で戦争当時九才。夜になると、

「空しゅう警報。空しゅう警報。」

と、放送が鳴るたびにびっくりして飛び起き、防空頭巾をかぶってリュックサックを背負って山にある防空ごうに逃げこみました。そんな大変な中でも小学校には通えたそうです。

ある日、家に“赤紙”が届いて、お父さんが出征の命令を受けました。その時おばあさんは、無事に帰ってくることを祈りながら国旗に自分の名前を書きました。当日、お父さんは白馬に乗り、旗をふって近所中の人々と見送ったのを覚えているそうです。お父さんはフィリピンのミンダナオ島に向かったそうです。しかし、戦争が終わっても帰ってこず、何日か経ってお父さんが亡くなったことが知らされました。八月五日に亡くなったことになっているけど、合同いれい祭で受け取った骨箱にはお父さんの骨はなく、小さな石ころが入っていたと言っていました。

小学校の朝礼は、毎日校長先生が“教育勅語”を読み、皇居がある方向に体を向けて全員で敬礼をしました。天皇陛下のために命をささげるという意味を持っていたそうです。戦争が始まった頃は「日本が勝った！勝った！」と喜びながらちょうちんを持ってにぎわっていたけど、次第に喜びから苦しみに変わり、見る見るうちに食べ物や着る物もなくなっていきました。

天皇陛下が終戦を伝える放送が流れると、その日の午前中まで戦っていたのに、一気にぴたっと止まったと言います。前日もB29が飛びかい、夜中も空しゅうがあったのに、うそのように何も起こらなくなり、信じられない気持ちだったそうです。

お話を聞いて思った事は、昔は人々が戦とう機に乗ったり武器を持って戦っていたけど、令和の今は、目には見えない新型コロナウイルスと戦っているという、常に何かと戦っているということです。空しゅうが来たら防空ごうの中に入る、コロナウイルスにかからないために家で過ごす、お国のために戦う兵隊さんは、今だったらコロナウイルスの一番近くで戦う医療関係者だと思います。

おじいさんとおばあさんは、戦争について、まるで昨日の事のように話して下さいました。私が平和な時代に生まれてこれたのは、戦争を必死に乗り越えてきた今の高齢者のおかげであると思います。今は戦争がなく、これからもあってはならないです。しかし近年は自然災害が多いです。戦争がなくても何かが起こった時に困らないようにするために、ひ難訓練や防災訓練をしたり、生きていくために必要な物を備えておかなくてはならないと、改めて思いました。

実際に戦争を乗り越えた方からのお話を聞けたのは、とても幸運だったと思います。お話の最後に、

「話を聞いてくれてありがとう。何があってもめげずに前に進んでいってね。」

と言われ、私も何があっても強い心を持って生きようと思いました。おじいさん、おばあさん。これからも元気に長生きして下さい。

なぜ日本人は着物を着なくなったのか

板橋区立板橋第十小学校６年　井上（いのうえ）　花音（かのん）

わたしは着物が大好きです。毎年、おばあちゃんが作ってくれて、お正月やひな祭り、夏祭りなどで着ています。今では、海外の人も興味をもってくれていて、着物を着て観光しているところを見かけたことがあります。でも、日本人で着ている人はあまり目にしません。なぜ着なくなってしまったのでしょうか。実は、わたし自身着物のことをほとんど知らなかったので、まず着物の歴史について調べてみることにしました。

着物のはじまりは「小袖（こそで）」といわれるもので、この起源をたどると、弥生時代にまでさかのぼるのだそうです。弥生時代、男性は一枚の布を体に巻きつけた巻布衣（かんぷい）を、女性は穴に頭を通した貫頭衣（かんとうい）を着ていました。そして、飛鳥・奈良時代に身分制度ができ、手足が隠れて動きにくい服装をしている支配階級に対して、庶民（しょみん）が着る物として、貫頭衣に袖をつけただけの「小袖」が使用されるようになりました。

着物に大きな変化が訪れたのは平安時代です。支配階級の着物が「大袖」という袖口が縫われていない形に進化しました。この大袖を何枚も重ね着したのが十二単（ひとえ）です。その後、鎌倉・室町時代には、袖の下に袂（たもと）という装状のものがついた小袖が生まれ、これを「着物」と呼ぶようになりました。江戸時代には身分によって着物の素材や色が制限され、庶民は四十八茶百鼠（しじゅうはっちゃひゃくねずみ）と呼ばれる色合いの着物しか認められていませんでした。そこで、庶民は着物の柄や帯の結び方でおしゃれを楽しむようになったそうです。

ここからが問題です。明治時代になると、海外から洋服文化が入ってきました。洋服の方が着やすく、着心地も良かったこと、国民の海外に対するあこがれも強かったことで、着物はだんだん洋服に押されてきてしまいます。そこで、着物業界は、フォーマル化を図ることで生き延びようとしてしまいました。「普段着ではなく、品位のある特別な衣装」としたために、日常的に着用できるカジュアルな着物は消え、普段着はどんどん洋服に置き換わっていくことになりました。高価になった着物は庶民が購入する機会が減っていき、「着物をほとんど見かけない」という状況になってしまったのです。

これでは本末転倒だと、わたしは思いました。おばあちゃんは、少し汚れがあったりして安く売っていた反物（着物一着分の布地）や古着を使って、わたしの着物を作ってくれていました。それからおばあちゃんが亡くなった後、大事そうに箱にしまってあった古くてボロボロのノートを見つけました。おばあちゃんのおばさんが書いた着物の作り方の

ノートでした。これを見て、必死に勉強してくれていたことを知り、ありがとうという気持ちでいっぱいになりました。わたしが着物を着ることができていたのは、おばあちゃんのおかげです。

しかし、他にも着物を楽しめる方法はあります。今ではレンタルや安いリサイクル着物があり、五千円以内で買えるそうです。着付けが大変だと思われていますが、レンタルだったら着付けもやってもらえます。YouTubeにもたくさん動画があるので、それを見ればできるようになると思います。また、おばあちゃんはわたしが着やすいように、おはしょり（帯の下で着物を折り返した部分）を縫いつけたり、重ね衿（えり）や腰ひもも着物につけたりしておいてくれました。着付けが難しい人は、このように工夫してみてもいいと思います。

着物は、日本が世界に誇れる大切な伝統文化です。だからわたしは、たくさんの人に着物を楽しんでほしいです。そうすれば、この伝統をこれからもずっと守っていけると思います。

とうきとじき

板橋区立金沢小学校１年　鈴木（すずき）　貴裕（たかひろ）

ぼくのいえのしょっきだなには、そぼがあつめていたしょっきが、たくさんかざられています。それをみていたらしょっきの「そもそも」をかんがえたくなりました。かざってあるしょっきは、われものですがぼくがつかっているしょっきは、こどもようでわれません。なので、ぼくはどんなしょっきでしらべようか、まよいました。そこで、いえにあるしょっきをしゅるいべつにわけるようにしました。

ぼくがいつもつかっているしょっきは「じゅしせい」や「メラミンせい」でわれません。つぎに、われるしょっきをしらべてみたら、おおきなキーワードが「とうき」と「じき」にわかれていることがわかりました。

とうきのとくちょうは、みためがざらざらしています。それに、あつでで、たたくと「コンコン」とひくいおとがします。げんりょうはつちです。そして、つよいひかりをとおしません。それに、ひょうめんにこまかいあながあいています。なので、みずがしみこみ、つかううちいろもへんかしていきます。

つぎは、じきについてしらべました。じきのとくちょうは、みためがつるつるしています。それに、うすでで、たたくと「キンキン」とたかい、きんぞくてきなおとがします。そして、つよいひかりをとおします。それに、ひょうめんにこまかいあながありません。なので、みずがしみないせいしつになっています。

そのみわけかたをもとに、いえのしょっきをしらべてみると、コップやおさらは「とうき」「じき」それぞれありました。てにとってくらべていくうちに、どうしてじきはとうきよりつるつるなのだろうかとぎもんにおもいました。ぼくのよそうでは、とうきはざいりょうがつちだから、ざらざらなのだろうかとおもいました。そのよそうは、あたっていました。ふるくは、へいあんじだいからやかれていたとうき。げんりょうとなるつちのとくちょうが、そのままでているものがおおいそうです。つぎに、じきがつるつるしているのはなぜか、じぶんでよそうしました。じきは、もともと、うすでなので、げんりょうが一かしょにまとまっていないからだとおもいました。じぶんのよそうはあたっていませんでした。こたえは、じきはこまかくくだいた、いしでできていて、そのはんぶんいじょうがガラスしつになっているからということでした。

さらにしらべていくと、とうきとじきはそれぞれのちいきによって、なまえがちがって

いることがわかりました。そこで、ぼくがかよっている「かなざわしょうがっこう」のなまえのもとになっている、いしかわけんのじきをしらべることにしました。いしかわけんでゆうめいなのは、「くたにやき」です。さいしょにしらべてわかったのは、うつくしくちからづよいいろえが、せかいでにんきになっていることです。つぎにわかったのは、えどしょきにくたに（げんざいのかが）でこうざんのかいはつちゅうに、しつのいいとうせきがはっけんされて、はじまったことです。くたにやきのしゃしんをみると、はなのえがおおくえがかれていることをしりました。さいきんのくたにやきは、はなのがらだけではなく、ドラえもんやいきもののがらなどがあり、一つ一つえがかれているいろがあざやかだとおもいました。

ははといっしょにこれをけんきゅうしているうちに、じたくでかんたんにとうきがつくれるものをみつけたので、つくってみました。やくまえのさわりごこちは、やわらかくて、あぶらっぽかったです。やくまえよりやいたあとのほうがかたくなっていることがわかりました。ほんたいは、ふつうのとうきとおなじ「コンコン」とおなじおとがします。つくってみて、すごいさくひんができて、たのしかったです。

こんかいぼくはしょっきをしらべてみて、とうきとじきにおおきくわかれていることとやきものにも、なまえがあることをはじめてしりました。これからはしょくじをするときに、とうきかじきか、どちらなのかきにしながらたべてみたいとおもいます。

しゅるいべつにわけたしょっき

ちちといっしょにつくったとうき

つづいてく、つながってく

板橋区立金沢小学校２年　鈴木（すずき）　統眞（とうま）

ぼくのおじいちゃんも、そのまたおじいちゃんも、みんなずっとずっと板橋の地で育ってきた。おじいちゃんは中山道を歩いて小学校に通って、大きくなってからは、区役所前駅からピカピカの都営地下鉄にのってお仕事に向かった。三年前に白血病をわずらってから亡くなるまで、ずっと病院から出られなかったけれど、本当は自分の生まれ育った板橋にもどってきたかっただろうなとぼくは思ってしまう。そんな中、ぼくが何気なく手にとった、地いきのささえ合い活動をしている人々の作った『わたしのお出かけマップ』の冊子。おじいちゃんにとっても原点でふるさとでもある板橋のわくわくする見所がたくさんのっており、地図をむちゅうになってゆびでたどった。ぼくらの街をしらべてみようと思った。

まずはじめに、ぼくは石神井川ぞいを歩いて仲宿をぬけ、観光じょうほうの宝庫である「いたばし観光センター」をめざすことにした。

石神井川、毎年さくらがきれいで大好き。夏にはたくさんのセミとも出会える。そして仲宿の街は、平日もお休みの日も、みんなが楽しそうに行き来していて活気がある。マルジューのコッペパンを買ってもらった。おいしいね。全国の商店街に元気がなくなっているとニュースでみたことがあるけれど、ここはまったくちがっている。そして大きな「仲宿」のかんばんをぬけ、「板橋宿」、いよいよいたばし観光センターへ。

たくさんのパネルがてんじしてあり、しせつや建物・文化についてかかれていた。ぼくがゆっくり見学していたら、センターの先生が親切にパンフレットや本をもってきて下さった。

「今きみが通ってきた石神井川はげんざいの板橋の人々の生活をささえる大きなエネルギーの一つなんだよ。きみのすんでいる加賀はむかし板橋火薬製造所があって、川の水力が火薬を作るのにやくだっていたんだよ。春にはさくらがさいて、みんなの心をゆたかにしてくれるけれど、さんぎょうの近代化をもうるおしたものなんだ。」

ぼくはとてもおどろいた。まさか加賀の地で大砲や火薬が作られていたなんてはじめて知った。平成二十九年には国史跡に指定されているそうだ。加賀はん下やしき時代、エライおとの様がすごした場所は、時をこえて製造所として役目をはたし、ぼくらが楽しみをわかち合う公園のすがたになったのだ。ぼくはこの地をふみしめてきたたくさんの人々の

思いを考えると、ふしぎな感動でいっぱいになった。

加賀西公園の中にある圧磨機圧輪記念碑についてもおしえてくれた。これは、明治九年にオランダで学んでいた沢太郎左衛門がもち帰ったものであり、火薬を作る時につかわれて、そのまま陸軍省が設置したのだそうだ。

明治から戦争がおわる頃まで、交通路のせいびとともに区内全域の工業がはったつしていった。げんざい板橋区には百もの商店街と都営地下鉄三田線がそんざいしている。時代のながれと生活スタイルを作り上げてきたのは、人々のがんばる力としんじる力のおかげだとぼくは思う。

つぎの日、ぼくはおじいちゃんの生まれ育った家に行くことにした。小学生になったぼくを見てとてもよろこんでくれたおじいちゃんのお兄さん。たくさんお話してくれた。

「ここらの子どもたちはしぜんにめぐまれた場所も多いから、くふうしてあそびを考えることができるね。多分きみがあそんでいる公園で小さいころわたしたち兄弟もあそんでいたはずだ。」

いつもいる場所がとくべつに思えてくる。世代をこえて街のたからものを共有し、大きくなっていくぼくら家族。いろいろな人々のねがいや思いを受けて、今度は自分がれきしを作る番だと、今そう強くかんじている。

屋根裏の神様に思いを寄せて

横浜市立日限山小学校５年　徳安（とくやす）　佑香（ゆうか）

新型コロナウィルス感染症対策の影響で、例年の家族旅行も中止になり、短い夏休みになりました。たいくつそうにしていた私を、父と母が買い物に連れ出してくれました。着いた所は、家の近くにある広い畑でした。畑の端には大きな民家がありました。そこでは、毎朝畑でとれたばかりの野菜を売っています。スーパーではなく、直売所で買い物をするのは初めてです。めずらしくてキョロキョロあたりを見渡すと、天井の太い柱に大きくて立派な飾りがありました。つるやかめが描かれ、広げた扇や紅や白の四角い紙を連ねたものや水引きがついていました。私はお正月に玄関に飾るしめ飾りみたいだなと思いました。

「これは何ですか？」

と聞くと

「この家を建てたときに祭った神様よ。」

と教えてくれました。柱についた神様を今まで見たことがありません。不思議に思った私は、それについて調べてみることにしました。

小さいころからお参りしている永谷天満宮という神社があります。まずは、神社の神主さんに伺うと、

「それは、家を建てるときに行う上棟式で祭った神様かもしれないですね。」

と教えてくださいました。

図書館で建築と日本の伝統について調べると、上棟祭とは、家が完成するまでの安全を祈るものであることがわかりました。家の骨組みが出来上がり、屋根をささえる大事な横木「棟木」をとりつける時、施主とその家族や工事をしている人たちが集まって、神さまに工事が順調に進んでいることを報告して感謝し、完成するまでの安全をお祈りするのです。

私が見た飾りは「幣束」でした。

幣束とは、棟木につける魔よけの飾りです。上棟祭でとりつけ、建物の四隅に酒と塩、米などをまきます。地方によっては、施主や工事関係者の人が２階からお金や餅をまくところもあります。これは、家の災いをのぞき、福をわけるために行われるそうです。父や母が子どもに頃にはよく見たそうです。でも、私は見たことがありません。私もやってみ

たいです。

また、幣束は正月のしめ飾りにも似ていたので、しめ飾りについても調べました。しめ飾りは、飾られた場所が神聖で、年神様を迎えるのにふさわしい場所であることを示すものです。紅と白の四角い紙は、紙垂といい、けがれたものの侵入を防ぐ魔よけの意味があります。扇は末広がり（だんだん栄えること）につながり、めでたいことを表しています。

しめ飾りと同じように、扇がついていた幣束は、魔よけだけでなく、その家が栄えていくようにと願いが込められていたんだと思いました。

神主さんや私の家を建ててくれた方に聞いたところ、今、上棟祭を行ったり幣束を祭ることは少なくなったそうです。私にとって家は、眠ったりご飯を食べたりする場所でした。幣束を調べてみて、家は場所だけでなく、家主の顔や住んでいる人の想い、続いていく血筋を表す深い意味があることを知りました。このような、日本に古くから伝わる考え方がなくなってきているのは寂しいことだと思います。私が家を建てる時には上棟祭をやりたいです。そのためには、少し前の日本の考え方をふり返り、もう一度、家や日本古来の考えについて学びたいと思いました。

参考文献

・『ポプラ社情報館　年中行事』 監修　新谷尚紀、株式会社ポプラ社
・『くうねるところにすむところ　19　子どもたちに伝えたい家の本　家づくりのきまりとくふう』 堀啓二、株式会社インデックス・コミュニケーションズ

いたばしの田遊び

板橋区立志村第四中学校２年　増澤（ますざわ）　玲音（れいん）

私は今までの人生のほとんどを、ここ板橋区で過ごしてきた。しかしながら、板橋の伝統的な祭りや習慣を知っているかというと、「いたばし花火大会」程度しか思い付かなかった。同じ板橋に住む友人に聞いてみても、私と同じような意見しか出なかった。これは由々しき事態なのではないか。板橋に住み、これからの板橋を形づくっていく私達が、地元の伝統芸能の一つや二つも語れないなど、言語道断である。私は一区民として、語り継いでゆく者としての役目を感じ、板橋区立郷土資料館を訪れた。

資料館一階の常設展示室では、板橋区の歴史について、数多くの現物を見ながら学ぶことができた。実際に発見された年季の入った古めかしい展示物は、私に今まで遠い存在だと思っていた歴史を、ぐっと身近に感じさせた。今、自分が立っている場所から、教科書やテレビで見るような化石や鉄砲などが出土されたと思うと、感慨深い気持ちになった。

板橋の古き良き歴史に心躍らされながら館内を見学する中で、私はある展示物に目を奪われた。それは全て藁で編まれ、直径八十センチメートル程の大きな長靴のようなものだった。解説欄を見ると「赤塚諏訪神社田遊び道具よねぼう」と記されていた。「田遊び」「よねぼう」私にとって未知の言葉ばかりの説明と、今までに見たことのない形の巨大な藁の束を私はくわしく知りたいと思った。そこで、私は館内の学芸員の方にお話を伺うことにした。

学芸員の方は、田遊びについて教えて下さった。田遊びとは、男性が田植えの流れを歌や踊りで表現し、稲の豊作と子孫繁栄を祈る行事であり、毎年二月半ばに夜に行われるそうだ。板橋区内では赤塚氷川神社、徳丸北野神社、そして赤塚諏訪神社で行われており、全国にも普及しているが、昔からの形が変わらず残っているのは板橋だけらしい。

私は、こんなにも伝統的で歴史がある祭事が、板橋区内で行われていることに驚いた。今まで私がどれほど自分の郷土に関心がないのかが分かった瞬間だった。

さらに話を聞かせて頂くうちに、よねぼうとは何か知ることができた。私が大きな長靴だと思っていた、赤塚諏訪神社で用いられるよねぼうは、神事で使用する人形で、男性と女性を模した藁人形を一つにまとめたものであると分かった。確かに、大小二つの藁で編まれた人形がしっかりと一つに結びついている。私には大きい方が男性、小さい方が女性を表し、二人が支え合っている様子に見えた。今も昔も愛し合う人々の理想の形は変わら

ないのだと、心が満たされる気持ちになった。祭りでは「もがり」と呼ばれる、神社の拝殿前に四角くしめ縄を張った空間に「寿」の文字を貼り付けた状態で運ばれる。この所作は田植えの様子を表しており、よねぼうは米の苗という意味も持っているらしい。もう一つのよねぼうの意味を知り、私はよねぼうは、夫婦という意味合いよりも、子どもという意味の方が強いのではないかと考えた。なぜなら、苗も子どもも育っていくものであるため、二つを重ね合わせたのではないかと考えた。稲の豊作と子孫繁栄を祈願する祭りとはよねぼうの意味に関係があったのかと、驚嘆の思いだった。祭りに使う道具一つに込められた思いや工夫が伝わってきた。

学芸員の方は、よねぼうの隣に展示されていた「武蔵野話」にも着目された。武蔵野話は郷土資料館の中で最も古い蔵書らしく、江戸時代から田遊びが続いてきた証拠として、祭りの様子が描かれている。開かれているページには「赤塚村牛をひきまハす図」という赤塚田遊びの挿絵があった。牛が描かれた紙を額につけた男性と、その面をひもで引く男性。まさに牛を引きずり回している様子だ。年季が入り茶色くくすんだ資料は、文政十年（一八二七年）には既に存在していたという田遊びの歴史を物語っている。

人々は昔から、人の為を想い、祈りを捧げてきた。そのうちの一つが田遊びである。藁で作った人形は、苗と子供という二つの異なった意味を持ち合せ、どちらもよく成長するようにという願いを込めて、神事で受け継がれ、今に至る。ここ板橋に住む人々は、代々田遊びを行う方々の祈りを受けて育ったのだろう。私もそのうちの一人である。今回、国重要無形民俗文化財にも指定されていたといういたばしの田遊びを知ることができたのは貴重な経験となった。人は人の助けを借りて生きているというが、私の生活があるのも、田遊びがあってこそなのかもしれない。同じ地区の人々のために歌い、踊り、願うことを全員が懸命に行う祭りを、古くからほぼ変わらない形で引き継いだ板橋の人は素晴らしい。郷土愛を持ち、仲間想いな人が集う田遊びは、後世へと必ず残し、永遠に廃れさせてはならないと感じた。

原爆について

板橋区立志村第四中学校２年　平野（ひらの）　日菜（ひな）

巨大なきのこ雲、凄まじい熱線、爆風、北西に広がった黒い雨‥‥‥悲劇は、一九四五年八月六日午前八時十五分に広島で起こった。

私は一昨年、平和記念公園と原爆ドームに行った。広島平和資料館で私は、焼け焦げた女子学生の夏服、黒焦げになった弁当、八時十五分に止まった時計、黒い雨の跡、爆風で折れ曲がった鉄扉など様々な原爆の恐ろしさを伝える展示物を見た。私は原爆の威力は想像以上に凄まじいものだったのだなと驚いた。写真や実物の展示物は実際にあったこととは信じられないほどに怖くて痛々しく、展示物の一つ一つにそれぞれ足が止まった。

原爆ドームは被爆前の広島県物産陳列館の写真と見比べて、同じ建物とは思えないくらいに変わっていて凄い威力がある原爆だったのだなと思ったのを覚えている。

このように一昨年、広島平和資料館、原爆ドームを見て凄く心が動かされた。しかし今は広島も原爆が落ちたと思わせるものはほとんどなく、当時とは全く違う場所のように、人が普通に住めるようになっていて、あまり広島で七十五年前と大昔とはいえない頃に原爆が投下されたとは実感が湧かない。そこで私は被爆者である祖父に話を聞いてみることにした。広島市内で被爆した祖父は当時一歳六ヶ月だった。祖父は家にいる際に被爆し、その後、爆心地のより近いところにある病院に行った高祖母を探したという。しかし、家族みんなで探したが、周りはみんな黒焦げになってしまった人ばかりで見分けがつかずに見つけることができなかったそうだ。そして助かってほしいという気持ちも虚しく八月六日に亡くなっていたことが後に分かったそうだ。この話を聞いて私は本で見た黒焦げになっていたというのが実際に起きていたのだと改めて知ることができた。

祖父は、赤ちゃんの時に被爆したためあまり覚えていないということだったので、中学生になってから聞いた佐々木禎子さんの話をしてもらった。

佐々木禎子さんは二歳で被爆して十年後、白血病と診断され入院した。入院していた時に名古屋の高校生から千羽鶴が送られてきたのをきっかけに病気を治したいと願いを込めて折りづるを折り始めた。折り始めて一ヶ月足らずで千羽に達し、それ以降も禎子さんは鶴を折り続けた。禎子さんは一九五五年十月二十五日に亡くなった。鶴は千三百羽以上にもなった。禎子さんは平和記念公園にある「原爆の子の像」のモデルにもなっている。これは、禎子さんのために何かしたいと思った同級生の竹組の生徒が、像を作ろうという運

動をしたことで集まった全国三千校を超える学校からの募金により、亡くなった三年後の一九五八年のこどもの日に完成した。

祖父は自分も同じようにならないかと不安だったそうだ。私は昔、佐々木禎子さんの本を読んで、原爆での死因は、熱線や火事、爆風による外傷だと思っていたから、放射線障害で、その上被爆後十年以上経って発症して亡くなってしまったというのは驚いた。だから、祖父は私の何十倍も驚き不安な気持ちになると思う。自分のこと、家族のこと、友達のこと、広島に住んでいたら、もちろん放射線を原爆で多く浴びてる人もいると思うからとても心配になると思う。

祖父は原爆も突然きたから、この先も何があるか分からないから、毎日、平和な事に感謝しながら生きなさいと言っていた。私も日常をあたり前と思わずに生きていきたい。

感恩戴徳と未来への期待

桜丘中学校２年　小澤（おざわ）　慶騎（よしき）

過去二十年間に七千の学校が廃校となり、これらの校舎の大半は取り壊されず放置されている。一方、数年前から地域活性プロジェクトとして校舎を別の形で再利用する動きもある。それを知った時脳裏に浮かんだのが「いたばしボローニャ子ども絵本館」だった。

我が家は史跡「縁切榎」横で五十年続く日本蕎麦屋だが、商売柄両親は忙しく、一人で暇を持て余す僕を見かねた祖父が連れて行ってくれた家の裏の場所が、世界百カ国、三万冊、七十言語の絵本を所蔵する絵本館だった。

絵本館は母も通った板橋第三小学校の一部を使用している。まさに今注目される廃校のリノベーションの先駆けだ。学校が平成十四年に閉校、その僅か二年後の十六年に開館されている。これ程早急に開館できたのは板橋区とイタリアのボローニャとの長く厚い友好の歴史のみならず、未知の世界へ広がる興味や関心、知識の習得、絵やストーリーから膨らむ想像力など絵本の力が子供達へ生かされるようにと設立に多くの方々が力を尽くされたことが実を結んだからに他ならない。

日常の喧騒から遮断された静寂の中、一歩足を踏み入れればそこは魅力的な絵本の宝庫。すぐにお気に入りの一冊を探そうと恰も宝探しに向かう冒険家の如く探究心に駆り立てられる。理解できないと知りつつ外国の言葉や美しい装丁や鮮やかな色使いにそそられ、漂（ただよ）う異国情緒に浸る。知っている絵本の英語版を見つけた時は達成感に包まれる。僕にとって絵本館は一日中入り浸っても時間が足りない発見と魅惑が溢れる場所だった。

「絵本は感性に訴えてくる」の言葉に耳を傾ければ、僕も確かに理論的に納得するよりも先に感情が揺さぶられる経験をしている。なかでも印象的なのが「ぐりとぐら（中川李枝子作）」だ。当書は一九九九年時点で九つの言語で翻訳されているが、作中の卵から作られる食べ物は日本の原書がカステラなのに対し、デンマーク版はスクランブルエッグ、フランス版はガレット、韓国版はパン、英語版はケーキと各国で違いがみえる。すると絵本館の方は各国版と並べながら、世界には日本語以外にも言語があり、多数の国が存在する。同じものを指しても国によって表現の仕方が違う、だから絵本は面白いと教えてくださった。大好きな一冊がこんなにも世界で愛されている事実も加えて衝撃を受けた僕は、帰宅後興奮しながら報告したと母の日記に残っている。

国旗に興味を持ち始めた時に薦めてくださった「世界の国旗図鑑」を手に地球儀で位置

を確認しては、世界の海は山はどんな風景が広がり、どんな人が暮らしているのか？それを巡らせては何度も想像の旅に出た。

「おはなし会」では主人公の気持ちがダイレクトに自分の中に入り込み、感情が湧き上がってくる不思議な体験もした。

そんな風に絵本館を通して得た経験も、僕達は同じ人間同士なのだから互いを認め、外見や偏見・無知で人を差別し、無関心を装ってはいけない。見ようと思えば見えてくるものがあり、知ろうとすれば知ることができる。だから刮目しなければならないと絵本から看取したことは、今の僕の根底に色濃く存在する。その一つひとつが、僕の今後の人生で「生きる力」「考える力」として育ち、やがて「無限の創造力」と化し、人生の糧となるだろう。

来年の三月、区立平和公園内に中央図書館新築に伴い、絵本館も図書館内に移設される。絵本の展示や貸し出し、児童エリアやカフェ、ホールなどもあるらしく、自然と悠久の歴史が織りなす板橋区にまた一つ魅力的なスポットが誕生するという。盛り沢山のコンテンツの中で僕が最も惹かれるのは、「緑と文化を象徴する」理念のもと、屋外で「おはなし会」のイベントも考えられていることだ。仮に実現すれば、平和の灯に見守られた自然の中で、風のさざめき、草木が擦れる音を聴き、空気の匂いを感じながら、絵本の世界へと誘(いざな)ってもらえるのだ。テクノロジーの発達とメディア環境の変化で想像力が欠如されていくと問題提起される中、これは物凄く贅沢で最高に幸せなことだ。

人は好きになったことや物は大切にするし、いつまでも忘れない。そして好きになるきっかけは興味や関心を持つこと。きっと多くの子供達が新しく生まれる絵本館で多様な興味や関心を萌芽させることだろう、かつての僕がそうであったように……。

今年世界は新型コロナウイルスへの感染が世界中で流行し、日本でもニュースで見ない日はない。また数々の予期せぬ未曾有の混乱に陥った。さらに今後、世界は益々複雑化し、先が読めない不透明な時代になるという。従来の考えでは超えられぬ壁も立ちはだかることもあるだろう。そんな時こそ、絵本から受けた無限に広がる「絵本の力」を信じ、上手に活用し、「創造的に考える」ことが大きな「強み」になっていくのかもしれない。

新図書館及び絵本館は「未来をはぐくみ、こころの豊かさと新しい価値を創造する」と謳っている。それが活性化されたならば、「本と人」「人と人」「人とまち」が繋がることで賑わいを創る交流空間が生まれ、憩いある拠点が生まれるのではないだろうか？もしそうならば図書館が、絵本館が「まち」を創ると言っても過言ではない。

価値観が多様化していく今、心の豊かさとは何か問いかけてみれば、それは目に見えないものの価値だと答えたい。物を持っていることが豊かさの証拠だった時代は終り、それ以上に目に見えないものの中に豊かさを見出すことにより生じる心の豊かさがあると考える。また、価値観の多様性を知り、認め合うこととも考えている。日々の何気ないありふれた日常の中で、ふとありがたみや幸福感を感じることができれば心が豊かなのだと思う。そして心が豊かなら、人と分かち合うことができるのだとも。人間は元来群れて行動してきた動物だから、人とのコミュニケーションが不可欠であり、人の役に立つこともまた欠かせない。人の役に立つことに人生の意味があるとするなら、そこに幸福感を感じられるのだとしたら新生される図書館や絵本館は、どんな形で一翼を担って行くのだろうか？それを僕は長い人生の中でゆっくりと見届けていきたい。

最後に、幼かった当時の僕の好奇心にいつも快く付き添い、同じ目線で接しながら「絵本は読むもの見るもの」という固定概念を払拭し、時に優しく、時にユーモアを交えつつ、視界を広げ心を広げ、まだ未知なる物事を見つけようと、「見えないもの」を見ようと共に挑んでくださった絵本館の方々に感恩戴徳を深く抱く。

姿を消した長半てんと願いが残した大漁旗

日本大学藤沢中学校１年　徳安（とくやす）　諒音（あきと）

今、僕の部屋には宝物の長半てんが飾ってある。この長半てんは、小学校生活最後の運動会に、クラスのみんなで揃えて「ソーラン節」を踊った時のものだ。

長半てんは、普段洋服を着ている僕にはなじみのないものだ。長半てんとは何だろう、なぜ、ソーラン節を踊るのに長半てんを着るんだろう、疑問に思い、調べてみることにした。

長半てんとは、大漁の際、船主や綱元が船方や親類縁者といった漁の関係者に、祝いの品として配った華やかな着物のことである。漁師が神社仏閣に参詣するときに祝宴の時着用していた。江戸時代中期末から後期にかけて房総で生まれ、北は青森県、西は駿河湾の焼津辺りまで伝播した。呼び方はマイワイが一般的であるが、東北地方の一部で長バンテン、大漁バンテン、カンバンなどと呼ばれ親しまれていた。しかし、東北地方で昭和五十年代に配られたことを最後にその習慣は終了した。

僕の長半てんには、ポスカで海の絵が描いてある。旅行で行った大島の博物館で見た本物の長半てんは、しっかりした木綿の布地に、家紋やつるや松が色鮮やかに染めてあり、とても美しかった。

長半てんを調べていくと、よく目にするのが「大漁旗」だった。黒や紺の布地に細部まで鮮明に描かれている長半てんと違い、赤や黄色や緑の布地に、色とりどりの染具で大きく文字や絵で描いてある大漁旗は見ているのがとても楽しかった。いったいどうやって作っているんだろう。そう思った僕は、大漁旗を作ることにした。

大漁旗は、室町時代末頃、航海の際船印として立てられたのぼりから発祥したとされている。神奈川県立歴史博物館には白地に黒で記号と文字が描かれた北条家過所船旗がある。これは鎌倉時代にこの旗を掲げる船の航行や諸国の港湾施設の利用などを許可したものである。このような旗が大漁旗の元になったのではないかと僕は考えた。

大漁旗は、木綿地にもち米とぬかを混ぜて作った「もち米のり」で絵を描き、その絵を顔料を混ぜて作った染料で染めていく（顔料を混ぜるのは色やけを防ぐため）。この時の染色技法は、万祝（長半てん）染めがそのままいかされている。

三崎港のそばに「三富染物店」がある。1833（天保４）年、江戸時代から続く老舗で、現在七代目、神奈川県で唯一１軒、大漁旗を作っている店である。大漁旗は「かながわの名産百選」に選ばれている伝統工芸品である。

工房は店の裏手にあった。工房には僕の数倍（実際は八畳分）ある白い旗がロープにかかって広げてあった。大漁旗は色のついた布地に絵を描いていくと思っていたが、僕が画用紙に絵を描くのと同じように、真っ白い布地に絵や文字を描いていた。しかも布地は机の上に置かれておらず、ロープで張られ、空中に浮いていた。その状態で旗の裏側から染めていくのだ。予想外の状態に、僕は少し混乱した。

旗の絵は、僕が大好きなカジキマグロにした。諒音と、僕の名前も大きく染める。下絵を見て、なんだかワクワクしてきた。染めはじめはカジキマグロではなく、大きめのはけでバックの中央から染めていく。僕が時間をかけて丁寧に染めていると

「丁寧は大切。だけど手早くだよ。乾いてしまうからね。」

と三富さんが教えてくれた。初夏の蒸し暑い日だったが、クーラーがなかったのはそれが理由だったのだ。

バックや名前を添えた頃、逆さ絵にも慣れ、僕の混乱も落ち着いた。次はメインのカジキマグロだ。三富さんが作った色鮮やかな染料の中から自由に色を選んで、目や角、体を染めていく。体は、ただ染めるだけでなく、ぼかしばけというはけを使い、ぼかして染めた。カジキマグロが生地の海で元気に飛びはねる。命を宿した瞬間だ。三富さんに教えていただいたぼかしの技法を使い、海の波にも命を与えた。僕の大漁旗の完成だ。

染めあがった大漁旗は色鮮やかでとても美しかった。大漁旗の役割である「漁の安全を祈願すること」「陸で待つ人に大漁を伝えること」「安全に帰ったことを知らせること」の意味が一瞬でわかった。

大漁の証である万祝（長半てん）は、現在、その習慣を終えてしまった。漁の安全を願い、大漁を願う大漁旗は、今日も船の上で、はためいている。この違いは「願い」という人の想いをのせているからであろう。

今、漁獲高の減少や価格の低迷、働く人の減少などから漁船も少なくなり、大漁旗の生産も減少しているそうだ。しかし、これからも大漁旗は人々の願いをのせ、長くあり続けてほしいと強く思った。

参考文献

・『小田原城特別展「万祝」』小田原城天守閣
・『開館25周年記念企画展　万祝　房総の紺屋と万祝いの伝播』千葉県立安房博物館
・『日本の伝統工芸』金子健一、神奈川県政地方記者会
・『ポプラディア情報館　関東地方』小松陽介　他２名、ポプラ社